



むこう側

〈鳥取県〉

なかやま さおり
中山 早織 32歳

早期がんの多くは、抗がん剤の治療をすれば治る。でも10代の女の子にとっては「髪の毛がなくなるなんて死んでも嫌」な場合もある。涙ながらの家族の説得で治療を決めたものの、気持ちが悪く立った彼女には、周り全てが敵に見えていたことだろう。病室内で暴れ叫ぶ彼女が、看護師1年目の私には怖かった。

私が彼女の受持ちだったある日、検温中に「いつになったら毛が生えてくる？」と聞かれた。彼女はウィッグを着けていた。下手なことを言っただけではない。何か質問されたら「医師から聞いています通りです」と言うことになっていた。私はそのせりふを口にした。

「いや、医師とかいいから。今までの経験上でいいから教えて」

まだ1年目だからこんな経験初めてだ。どうしよう。真つすぐな瞳で見つめられた私は、自信のなさを見透かされたようで耐えきれず、思わず目をそらした。その時である。

「今、笑っただろう！ 私の髪がないのが、そんなにおかしいか！」

彼女は怒声と共に私に詰め寄り、後ずさる私のお腹に向けて力いっぱい500ミリのペットボトルを投げつけた。先輩によりその場は収められたが、人からあんなに「怒り」をぶつけられたことは初めてで、お腹の痛みよりも、真つすぐな瞳をかわすことしかできなかった。自分が情けなくて、涙があふれてきた。

もう彼女と関わりたくなかったが、先輩からプロとして患者と向き合うよ

う言われ、当たり前障りない関わりを続けた。仕事に行くのが苦痛だった。

「ペットボトル投げてごめんね」

退院時、ぶつきらぼうに彼女にそう言われた。あれから1カ月半が経過していた。きつと、ずつと気にして、最後だからとよそを向きながら口にしてくれた彼女のその言葉に、私は胸がいつぱいになった。

私こそ、きちんと向き合えなくてごめんさい。あなたのおかげで、逃げない自分でありたいと強く思えた。ヒリヒリ痛んでいたはずのお腹が、今度は何だかむず痒^{がゆ}かった。「働くことのむこう側」が、少しだけ見えた気がした。